

# 看護学科・理学療法科・作業療法科学学生の 医療専門職に対するイメージの変化 卒業生の講話とグループワークを通して

辻 慶子<sup>1</sup>・鷹居樹八子<sup>1</sup>・中尾 優子<sup>1</sup>  
岩永喜久子<sup>2</sup>・田代 隆良<sup>1</sup>

**要旨** 新入生合同研修で「看護・理学療法・作業療法三職種の専門性の理解と相互理解」を目的として各学科の卒業生の講話とグループワークを行った。各学科の学生は、他職種の役割・機能を知る機会となった。そこで、各学科の学生が職種イメージをどのように持っているかを卒業生の講話とグループワークの前後で調査した。その結果、自分の志望する専門職に対しては、最初のイメージで専門職の業務内容がしっかりと認識され、検討後、その内容が深化し、幅が広がっていることがわかった。また、他専門職との「協働・連携」のイメージが明らかに表現されるようになった。他専門職の見方の変化では、卒業生の講話を通し、具体的な3職種のかかわり方が見えてきた。

長崎大学医学部保健学科紀要 14(2): 115-123, 2001

**Key Words** : イメージ, 看護婦(士), 理学療法士, 作業療法士

## はじめに

近年の加速する高齢社会に伴う国民のニーズに対応するには、保健医療専門職の連携によるサービスと資質の向上が必要であるという考えに基づき、長崎大学医療技術短期大学部では、看護学科・理学療法学科・作業療法学科の3学科を設置し、教育を行っている。学生も日頃の講義でチーム医療の必要性や重要性について学んでいるが、具体的にそれぞれの職種の役割・機能についてはよく理解していないのではないかと考える。特に入学して間もない1年生ともなると、皆無に等しいと考える。今回、「それぞれの職種を理解することで、お互いを尊重し協働してより良いケアが提供できる。三年間の学習の中で協働する基盤を養う。」の2点を目的に新入生合同研修が行われ、「三職種の専門性の理解と相互理解」を目的として各学科の卒業生からの講話が行われた。各学科の学生は、他職種の役割・機能を知る機会となる。そこで、今回、学生が各学科の職種のイメージをどのように持っているかを調査し、その後に卒業生の講話を聞き、学生間でグループワークを行い、再度、各学科の職種に対するイメージを調査した。その結果を報告する。

## 研究方法

### 1. 調査対象

平成13年4月入学の看護科73名、理学療法科20名、作業療法科20名の113名

### 2. 調査期間

平成13年5月10・11日

### 3. 調査方法

事前にそれぞれの職種に対するイメージを書いてもらい、講話の前までに集計しておく。

卒業生の講話・質疑応答終了後、学生全員に集計の結果を知らせる。

その後、各学科に別れ、以下のテーマで話し合いをする。

ア. 他の職種に理解されていないのはなぜか。

イ. 他の職種に理解してもらうために今後どのように働きかけるか。

ウ. 自分達も他の職種を理解するために今後どのように働きかけるか。

更に、その後3学科合同のグループになり以下のテーマで話し合いをする

A. 各科で話し合った意見を発表する。

B. 質疑応答を通して、各学科別のグループワークの結果に修正や補足を行う。

最後に、他の職種に対するイメージを各自記述する。

### 4. 分析方法

事前のイメージと終了後のイメージの記録を整理し、複数の教官で内容を分類した。

1 長崎大学医学部保健学科看護学専攻

2 長崎大学医学部附属病院

講話の内容

1. 看護婦 (保健婦) (以下NSという) 32才女性, 臨床経験11年

大学病院と保健所で勤務後, 現在は訪問看護ステーションに勤務している。大学病院では予後不良の患者が多く, 患者1人1人の生き様を見つめてきた。保健婦活動を通して, 大学病院勤務時代は疾患の理解が優先され, 生活していくためには何が必要かが把握できていなかったことに気づいた。現在は訪問看護婦として, 理学療法士や作業療法士, ヘルパーと共働して援助を実施している。対象者をそれぞれが異なる視点で捉え, その人の生活が広がるように情報交換や検討会を実施し, 各専門性を生かしながら活動している。

2. 理学療法士 (以下PTという) 22才男性, 臨床経験1年

病院勤務。仕事内容は, 脳卒中の患者のリハビリテーションを中心として行い, 座位バランス, 平行棒, 階段, 杖などの訓練を行っている。解剖学の講義は大切だと今思う。学生時代に仲間, 教官, 患者さんと話すことが大切で, そのことから視野が広がったと思う。医療人となって感じていることは, 患者さんが社会復帰をするために, チーム医療 (医師・看護職・PT・OTなどの話し合い) の必要性であり, 努力しながら実践している。

3. 作業療法士 (以下OTという) 24才女性, 臨床経験3年

病院勤務。仕事内容は, 身体の機能訓練だけでなく, 精神面, 職業面などへのアプローチを個別の特性を考えながら行っている。そのため専門性が薄いとも言われるが, 人が対象だから, PTとOTの担当領域がはっきり区切られていないのではないかと思う。1人の患者の回復のために, 各専門職と一緒に働くことで, OTのことを理解してくれると思う。患者さん, その家族, 他職種など多くの人との出会いがあり, 自分が成長できる職業であると考えている。

学生の背景

学生は入学後から研修参加まで以下のような専門基礎科目・専門科目が開講され履修中である。

1. 看護学科: 看護学原論, 看護技術論, 看護技術実習
2. 理学療法学科: リハビリテーション概論, 作業療法学概論, 理学療法学概論
3. 作業療法学科: リハビリテーション概論, 作業療法学概論, 理学療法学概論

上記の各科目が, 2~3回程度行われた時期である。

結果

1. 看護学科学学生から見たNS

看護に対する最初のイメージは「ハードな仕事」10.8%, 「やりがいのある仕事」8.2%, 「医師の補佐をする」7.6%, 「精神面への援助」6.3%, 「きつい」6.3%などの具体的な活動内容が見られた。検討会後のイメージは「大変そうな仕事」8.9%, 「やりがいのある仕事」8.1%, 「チーム医療」8.1%, 「きつそうな仕事」8.1%, 「看護婦の仕事の幅の広さ」7.3%, 「コミュニケーション (家族)」7.3%, 「コミュニケーション (患者)」6.5%であった。また「在宅看護にかかわること」4.8%というイメージの表出があった (表1)。

2. 理学療法科学学生からみたPT

最初のイメージは「基本的動作・運動能力を回復させる」21.4%, 「地味で根気のいる仕事」14.3%, 「知的でカッコいい仕事」14.3%, 「やさしい人が多い」10.7%であった。検討会後は「PTの仕事内容 (運動能力の回復など)」16.7%, 「体力が必要」16.7%, 「チーム医療」10%, 「OTとPTの密接な関係」10%であった (表2)。

3. 作業療法科学学生から見たOT

自分たちの職業に対する最初に持っていたイメージは「日常生活へ復帰させる」18.4%, 「楽しい」15.8%, 「遊びの中で治療を行う」13.2%, 「精神的ケア」13.2%などであった。検討会後は「歩行訓練」22.2%, 「幅広い仕事内容」16.7%, 「多様なアプローチ」13.9%, 「OTとPTの区別がない」13.9%であった (表3)。

4. 理学療法科学学生からみたNS

最初のイメージは「やさしい」22.2%, 「寝る暇がないくらい忙しい」14.8%, 「患者を理解しケアする」11.1%, 「医師の介助や処置を行う」11.1%, 「愛がありやさしい白衣の天使である」11.1%であった。検討会後は「ハードな仕事」18.5%, 「世話」14.8%, 「愛・白衣の天使」11.1%, 「忍耐」11.1%などであった (表4)。

5. 作業療法科学学生から見たNS

最初のイメージは「医療職の中で包括的な仕事をする」16.7%, 「忙しい」13.9%, 「きつい」13.9%, 「専門的な看護技術を持っている」11.1%, 「患者の身の回りの世話」11.1%などであった。検討会後は「いろんな場面で幅広い活動を行う職業」37.8%, 「死に直面することが多い」13.5%であった (表5)。

6. 看護学科学学生から見たPT

講話前の看護学科学学生から見たPTのイメージの結果は「リハビリテーションをする」45.6%, 「OTとPTとの違いがわからない」19.3%であった。検討会後は「機能訓練」21.4%, 「リハビリテーション」14.3%, 「OTと

PTとの区別がわからない」13.1%、「OTとPTとの区別はあまりない」10.7%、「チーム医療」10.7%であった(表6)。

#### 7. 看護学科学生から見たOT

最初のイメージは「リハビリテーション」22.2%、「わからない」16.1%、「障害者の機能回復」13.6%、「細かい作業などを行っていて機能回復を図る」12.3%などであった。検討会後は「精神的なりハビリテーション」12.9%、「範囲が広い」9.7%、「家族へ関わる仕事」8.6%、「OTとPTの区別がつかない」7.5%、「生活復帰の援助」7.5%、「細かい作業」7.5%などであった。(表7)。

#### 8. 理学療法科学生からみたOT

最初のイメージは「知的でやさしく友好的な仕事」30%、「手作業や細かい運動などを行う」20%、「精神的ケア」10%、「人体機能や細かい運動などの回復を助ける」10%、「応用動作訓練を行う」10%であった。検討会後は「精神的なケア」18.5%、「協力」14.8%、「幅が広い」14.8%、「社会復帰」11.1%、「上肢を中心とした日常生活動作の訓練」11.1%、「人とのふれあい」11.1%であった。(表8)。

#### 9. 作業療法科学生から見たPT

最初のイメージは「運動療法をする人」21.8%、「知的でやりがいのあるかっこいい仕事」15.6%、「機能的な自立能力の回復のための訓練」12.5%、「筋肉を治療し、スポーツトレーナーなど幅広く活躍する」12.5%など身体面のリハビリテーションに関するイメージが多く見られた。検討会後は「OTとPTの区別があまりない」21.2%、「機能回復」15.1%、「呼吸訓練」15.1%、「解剖学は必要」12.1%であった。(表9)。

### 考 察

#### 1. 志望する専門職の見方の変化

各学科の学生は最初のイメージで、各専門職の業務内容をしっかりと認識しており、さらに卒業生講話とグループワーク後、その内容が深化し、幅が広がっていることが窺われる。自分が志望する職業への関心が高いこと、一部ではあるがすでに履修が始まっていることから、卒業生講話の内容を理解しやすかったと言える。また検討後のイメージでは「チーム医療」のイメージが増加していた。

看護学生で卒業生の講話前後にNSのイメージに大きな差が見られなかったのは、自分自身が将来携わる職業のため、ある程度の把握は出来ていたためと考える。さらに、卒業生の講話が保健婦としての保健所勤務と在宅看護の関する内容であったため、病院などの施設内で勤務する看護職というイメージから対象が患者だけでなくその人を取り巻く周囲の人達も看護の対象であるという

イメージに発展したためと考える。しかし、大変そうとか、きつそうとか言うネガティブなイメージが講話の後も高率であったことは、仕事内容が人間関係であり、人の生命にかかわり、時間帯が不規則ということなどが経験談から実感として受け止められたことだと考えられる。

#### 2. 他専門職を志望する学生の見方の変化

##### 1) NSに対する見方

最初は、白衣の天使と言う言葉から想像される「やさしさ」「愛」というイメージと、ハードの業務内容がイメージされている。検討後は看護職の活動の多様性や日常生活援助、ターミナルケアなど、講話内容から幅が広く深まったイメージが表出されていた。このことから、他専門職の活動に接することが他専門職の理解に必要と思われる。また、検討会後にチーム医療や協働というイメージが出現していることは、卒業生の講話を通し、3職種の具体的なかかわり方が見えてきたためと考えられる。

##### 2) PT・OTに対する見方

看護学生はリハビリテーションという大きな捉え方をし、PTとOTの区別がつきにくいと言う表現が多いが、OTからPT・PTからOTでは、最初のイメージも的確に業務内容を捉えていた。検討会後は、講話に影響された業務の詳細な内容が記述されており、更に理解が深められた。

看護学生にとって、最初は、PTは身体面のリハビリテーション、OTは手作業的なりハビリテーションというイメージが多かった。これは、「作業」という言葉から「道具を使って・・・」「絵を描いたり・・・」「細かい作業など・・・」というイメージが出たのではないかと考えられる。PTに対しては、疾患のリハビリテーションのイメージが表出されている。看護職と比べ、PT・OTの絶対数が少なくリハビリテーションに携わる人と大まかに捉えていたと思われる。検討後もPTとOTの区別がしにくいという意見がある反面、チーム医療というイメージが多くなっており、医療がチームで行われるということ、3職種の具体的なかかわり方が見えたことなど、講話やグループワークの効果と考える。また、社会復帰や在宅ケアへのかかわり、精神面への援助などの具体的な技術や役割が明確に表現されていることなどは生活者としての患者に、多職種に関わる必要性や実際の姿がわかったのではないかと考える。

#### 3. 協働と連携

今回は入学後間もないことから、各専門に対する講義は、各専門の概論を2～3回程度受けただけである。各自が自分の専門に対する技術や役割についての知識を漸く学習しはじめた時期であり、他の専門職の役割や業務内容について理解できていないのは当然である。高齢社会に伴う疾病構造の変化により、保健医療福祉チーム

の協働が強く言われているにもかかわらず、協働すべき他専門職の技術や役割に対する理解が欠けていることが多く、実際の教育の中においても協働の必要性や意義について具体的には教えられていない。

WHO Study Group (1988年) はインタープロフェッショナル教育を、「一つの学生グループや異なる教育的バックグラウンドをもつ医療関連施設に従事しているワーカー達が、彼らの教育機関のある一定期間、健康の増進、予防、治療、リハビリテーション、そして、その他の医療に関連したサービスを提供するために協働するという重要な目標を持って相互に学ぶプロセスである」<sup>1)</sup>と定義している。すなわち、共通の目標を達成するために、それぞれが独立してサービスを提供するのではなく、効果的なサービスを提供できるようチームとしての連携を作っていくことが重要であると述べている。そのためには信頼関係と相互理解が必要である。

今回2時間という短い時間での3職種の討議ではあったが、討議後にチーム医療・協働という言葉が表現されるようになったことは有意義な研修であったと考える。更に、学生の履修状況に合わせ、卒業時までの学習段階ごとに各専門職の理解とチーム医療・協働についての意識を把握していきたい。

今後、このようなカリキュラムを意図的に組み入れることで、3職種の相互理解が深まり、インタープロフェッショナル教育への導入としての意義が高いと考える。

## 文 献

- 1) 大室律子：看護教育におけるインタープロフェッショナルワーク教育, *Quality Nursing*, 7(9), 748-753, 2001.
- 2) 吉本照子：インタープロフェッショナルワークによる専門職の役割遂行, *Quality Nursing*, 7(9), 740-747, 2001.
- 3) 鷹野和美：隣人を知ろう1 真のチーム医療実現のために 職種間の違いを知る, *看護教育*, 39(4), 296-297, 1998
- 4) 横川吉晴・福井幸子・鷹野和美：隣人を知ろう4 真のチーム医療実現のために 理学療法士, *看護教育*, 39(7), 573-575, 1998
- 5) 鷹野和美・渡辺明日香・真木誠・福井幸子：隣人を知ろう5 真のチーム医療実現のために 作業療法士, *看護教育*, 39(8), 702-705, 1998

表 1. 看護学科学学生から見た看護職のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
ハードな仕事	17 (10.8%)	大変そうな仕事	11 ( 8.9%)
やりがいのある仕事	13 ( 8.2%)	やりがいのある仕事	10 ( 8.1%)
医師の補佐をする	12 ( 7.6%)	チーム医療	10 ( 8.1%)
精神面への援助を行う	10 ( 6.3%)	きつそうな仕事	10 ( 8.1%)
きつい	10 ( 6.3%)	看護婦の仕事の幅の広さ	9 ( 7.3%)
身体・精神・社会面への援助	9 ( 5.7%)	家族とのコミュニケーション	9 ( 7.3%)
日常生活への援助	9 ( 5.7%)	患者とのコミュニケーション	8 ( 6.5%)
患者に最も身近な医療従事者	8 ( 5.1%)	在宅看護にかかわること	6 ( 4.8%)
夜勤が大変	6 ( 3.8%)	心、精神のケア	6 ( 4.8%)
採血や注射処置をする	6 ( 3.8%)	責任を自覚し、勉強をがんばる動機	5 ( 4.0%)
白衣の天使に代表される女性の職である	6 ( 3.8%)	人とのかかわり	5 ( 4.0%)
やさしく笑顔があり、頼りがいがある人	5 ( 3.2%)	医師の補佐役	4 ( 3.2%)
患者の世話	5 ( 3.2%)	責任が重い	4 ( 3.2%)
体力の必要な仕事	5 ( 3.2%)	身の回りの世話	3 ( 2.4%)
忙しい	5 ( 3.2%)	勉強の特性が分かった	3 ( 2.4%)
心配り、知識、技術が求められる	4 ( 2.5%)	イメージは変わらない	3 ( 2.4%)
身体面への援助	4 ( 2.5%)	生涯学習である	2 ( 1.6%)
コミュニケーションが重要	3 ( 1.9%)	忙しい	2 ( 1.6%)
入院や訪問看護など地域で患者のケアをする	3 ( 1.9%)	白衣の天使	2 ( 1.6%)
責任感が必要	3 ( 1.9%)	すぐに就職できるわけではないことが分かった	1 ( 0.8%)
暇がない	3 ( 1.9%)	身体面のケア	1 ( 0.8%)
自ら考えた行動をする専門職である	2 ( 1.3%)	医者への補助をするだけでなく、医者よりも重要な仕事	1 ( 0.8%)
患者の手助けをする	2 ( 1.3%)	優しく心に慈愛が満ちている人	1 ( 0.8%)
健康管理	2 ( 1.3%)	思いやりがある	1 ( 0.8%)
社会的評価を得ている	1 ( 0.6%)	いつも明るくて頼りがいがある	1 ( 0.8%)
医者よりえらい	1 ( 0.6%)	看護の知識を多く持っている	1 ( 0.8%)
医師の指示のもとに看護を行う	1 ( 0.6%)	愛がある仕事	1 ( 0.8%)
患者と医師の仲介をする	1 ( 0.6%)	時間が不規則	1 ( 0.8%)
チームを組んで仕事をする	1 ( 0.6%)	楽しい	1 ( 0.8%)
人とのふれあいが大事	1 ( 0.6%)	仕事を覚えたらなんとかやっているといていた看護の対象はいろいろ	1 ( 0.8%)

表 2. 理学療法学科学学生から見た理学療法士のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
基本的動作・運動能力を回復させる	6 (21.4%)	PTの仕事内容 (運動能力の回復など)	5 (16.7%)
地味で根気のある仕事	4 (14.3%)	体力が必要	5 (16.7%)
知的でカッコいい仕事	4 (14.3%)	チーム医療	3 (10.0%)
やさしい人が多い	3 (10.7%)	PTとOTの密接な関係	3 (10.0%)
運動療法や物理療法などのリハビリテーションを行う	2 ( 7.1%)	やりがい	2 ( 6.7%)
リハビリテーション	2 ( 7.1%)	解剖学は必要だ	2 ( 6.7%)
機能訓練を行う	2 ( 7.1%)	忍耐	2 ( 6.7%)
夢を与えてくれる仕事	2 ( 7.1%)	患者にあったプログラム作成	2 ( 6.7%)
フレンドリーになれる	2 ( 7.1%)	PTは人体面、OTは精神面で専門性がある	1 ( 3.3%)
チームワークが大事	1 ( 3.6%)	精神面のかかわり	1 ( 3.3%)
		格好よさ	1 ( 3.3%)
		愛	1 ( 3.3%)
		フレンドリー	1 ( 3.3%)
		頭がいい	1 ( 3.3%)

表3. 作業療法学科学生から見た作業療法士のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
日常生活へ復帰させる	7 (18.4%)	歩行訓練	8 (22.2%)
楽しい	6 (15.8%)	幅広い仕事内容	6 (16.7%)
遊びの中で治療を行う	5 (13.2%)	多様なアプローチ	5 (13.9%)
精神的ケアを行う	5 (13.2%)	OT, PTの区別がない	5 (13.9%)
園芸・手芸を通し機能回復を促す	3 ( 7.9%)	精神的な面	3 ( 8.3%)
OTに必要なこと	3 ( 7.9%)	チーム医療	3 ( 8.3%)
対象は子ども	2 ( 5.3%)	楽しい	2 ( 5.6%)
主に手のリハビリテーションをする	2 ( 5.3%)	仕事の大変さ	1 ( 2.8%)
社会復帰	2 ( 5.3%)	たくさんのお会いがある	1 ( 2.8%)
リハビリテーション	2 ( 5.3%)	コミュニケーション	1 ( 2.8%)
手作業でリハビリテーションを行う	1 ( 2.6%)	人間というものを考える職業	1 ( 2.8%)

表4. 理学療法学科学生から見た看護職のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
やさしい	6 (22.2%)	ハードな仕事	5 (18.5%)
寝る暇がないくらい忙しい	4 (14.8%)	世話	4 (14.8%)
患者を理解しケアする	3 (11.1%)	愛・白衣の天使	3 (11.1%)
医師の介助や処置を行う	3 (11.1%)	忍耐	3 (11.1%)
愛があり優しい白衣の天使	3 (11.1%)	チーム医療	2 ( 7.4%)
時間が不規則	2 ( 7.4%)	個々の患者に接する	2 ( 7.4%)
健康回復を手伝う	1 ( 3.7%)	幅広い仕事内容	2 ( 7.4%)
チームワークが大切	1 ( 3.7%)	やさしい	2 ( 7.4%)
忍耐力がある	1 ( 3.7%)	かわいい	2 ( 7.4%)
器用	1 ( 3.7%)	看護者がマネジメント	1 ( 3.7%)
清潔	1 ( 3.7%)	ナースの独立	1 ( 3.7%)
笑顔	1 ( 3.7%)		

表5. 作業療法学科学生から見た看護職のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
医療職の中で包括的な仕事をする	6 (16.7%)	いろんな場面で幅広い活動を行う職業	14 (37.8%)
忙しい	5 (13.9%)	死に直面することが多い	5 (13.5%)
きつい	5 (13.9%)	ハード	3 (8.1%)
専門的な看護技術をもっている	4 (11.1%)	やりがいのある仕事	3 (8.1%)
患者の身の回りの世話	4 (11.1%)	看護は時間がないくらい忙しそう	2 (5.4%)
医師の介助	3 (8.3%)	精神面のケア	2 (5.4%)
患者にとって身近な存在	2 (5.6%)	学習の動機付け (幅広い知識)	2 (5.4%)
患者にとって精神的な支え	2 (5.6%)	責任感	2 (5.4%)
やさしい人が多い	2 (5.6%)	協働	1 (2.7%)
新人はこわい・おそろしい	1 (2.8%)	患者と共に時間を過ごす	1 (2.7%)
きれいな仕事ばかりではなく汚い仕事もある	1 (2.8%)	コミュニケーション	1 (2.7%)
やりがいがある	1 (2.8%)	医者の手助ではなく、自分で患者とのつながりをたいせつにする	1 (2.7%)

表 6. 看護学科学生から見た理学療法士のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
リハビリテーションをする	26 (45.6%)	機能回復	18 (21.4%)
OTとPTの違いがわからない	11 (19.3%)	リハビリテーション	12 (14.3%)
きつくて体力のいる仕事	5 ( 8.8%)	OTとPTの区別がわからない	11 (13.1%)
歩行訓練を行う	4 ( 7.0%)	OTとPTの区別はあまりない	9 (10.7%)
機能回復	3 ( 5.3%)	チーム医療	9 (10.7%)
かんちがい	3 ( 5.3%)	コミュニケーション	4 ( 4.8%)
障害を持った人のリハビリテーション	3 ( 5.3%)	精神面でのケア	4 ( 4.8%)
骨折の回復へ向けてのリハビリテーションをする	2 ( 3.5%)	特に器具をもちいる	4 ( 4.8%)
		OTとPTの違いがわかった	3 ( 3.6%)
		社会復帰	3 ( 3.6%)
		デスクワーク	2 ( 2.4%)
		人づきあいにはユーモアと明るさが必要	2 ( 2.4%)
		経済面・生活面のかかわり	1 ( 1.2%)
		障害者にとっての役割	1 ( 1.2%)
		在宅ケアへのかかわり	1 ( 1.2%)

表 7. 看護学科学生から見た作業療法士のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
リハビリテーション	18 (22.2%)	精神的なリハビリテーション	12 (12.9%)
わからない	13 (16.1%)	範囲が広い	9 ( 9.7%)
障害者の機能の回復	11 (13.6%)	家族へ関わる仕事	8 ( 8.6%)
細かい作業などを行って機能回復を図る	10 (12.3%)	PTとOTの区別がつかない	7 ( 7.5%)
楽しく器用で女の人の多い仕事	5 ( 6.2%)	生活復帰の援助	7 ( 7.5%)
器具を利用, 研究したり作成する	4 ( 4.9%)	細かい作業	7 ( 7.5%)
道具を使って遊んだり作ったりする人	4 ( 4.9%)	PTとOTの違いはあまりない	5 ( 5.4%)
絵を描いたり, 折り紙をつかってのリハビリテーション	4 ( 4.9%)	多くの視点から機能回復に関わる	5 ( 5.4%)
やりがいがある	3 ( 3.7%)	社会復帰	5 ( 5.4%)
すばらしい仕事	3 ( 3.7%)	リハビリテーション内容	5 ( 5.4%)
根気がいる	3 ( 3.7%)	チーム医療	5 ( 5.4%)
精神面のケア	2 ( 2.5%)	体力・根気	4 ( 4.3%)
理学の応用	1 ( 1.2%)	PTとOTの区別が分かった	4 ( 4.3%)
		人との関わり	3 ( 3.2%)
		歩行訓練	3 ( 3.2%)
		在宅への関わり	2 ( 2.1%)
		楽しそう	1 ( 1.1%)
		器用そう	1 ( 1.1%)

表 8. 理学療法学科学生から見た作業療法士のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
知的でやさしく友好的な仕事	9 (30.0%)	精神的なケア	5 (18.5%)
手作業や細かい運動などを行う	6 (20.0%)	協力	4 (14.8%)
精神的ケア	3 (10.0%)	幅が広い	4 (14.8%)
人体機能や細かい運動などの回復を助ける	3 (10.0%)	社会復帰	3 (11.1%)
応用動作訓練を行う	3 (10.0%)	上肢を中心とした日常生活動作の訓練	3 (11.1%)
社会復帰	2 ( 6.7%)	人とのふれあい	3 (11.1%)
根気・体力が必要な仕事	2 ( 6.7%)	PTとOTの密接な関係	2 ( 7.4%)
チームワークが大事	1 ( 3.3%)	訓練	1 ( 3.7%)
理学療法と同じ仕事である	1 ( 3.3%)	専門性	1 ( 3.7%)
		器用	1 ( 3.7%)

表 9. 作業療法学科学生から見た理学療法士のイメージ

検 討 前	人数(%)	検 討 後	人数(%)
運動療法をする人	7 (21.8%)	PTとOTの区別はあまりない	7 (21.2%)
知的でやりがいのあるかっこいい仕事	5 (15.6%)	機能回復	5 (15.1%)
機能的な自立能力の回復の訓練	4 (12.5%)	呼吸訓練	5 (15.1%)
筋肉を治療し、スポーツトレーナーなど幅広く活躍する	4 (12.5%)	解剖学は必要	4 (12.1%)
一般にリハビリというとPTを指している	3 ( 9.4%)	コミュニケーション	3 ( 9.1%)
基本的動作の回復を行う	2 ( 6.3%)	運動療法	2 ( 6.1%)
足のリハビリテーションをし、歩くようにする人	2 ( 6.3%)	物理的な治療	2 ( 6.1%)
リハビリテーション	2 ( 6.3%)	家族とのコミュニケーション	2 ( 6.1%)
対象は体に障害がある人	1 ( 3.1%)	動機付け	1 ( 3.0%)
リハビリテーションの初期に関わる人	1 ( 3.1%)	治療	1 ( 3.0%)
物理的療法という固い感じの治療をする	1 ( 3.1%)	外見 (力持ち)	1 ( 3.0%)



## Change of students' images of nurses, physiotherapists, and occupational therapists through graduate student lectures and group work

Keiko TSUJI<sup>1</sup>, Kiyako TAKAI<sup>1</sup>, Yuko NAKAO<sup>1</sup>, Takayoshi TASHIRO<sup>1</sup>

1 Department of Nursing, Nagasaki University School of Health Sciences

**Abstract** Lectures by the graduate students and group work were performed at the training seminar for fresh students to learn images of medical professions and mutual understanding among them. The fresh students in courses for nursing, physiological therapy, and occupational therapy got an good opportunity to learn the role and function of other professions as well as their own. We compared what images the students had for each profession before and after the learning session. Main findings were 1) that they had recognized the contents of professional work of their own course before the learning session, 2) that the recognition to the work enhanced after the learning session, 3) that they understood the role and activities of professions of other courses after the session, and 4) that they clarified the image and importance of "collaboration and cooperation" after the session.

Bull. Sch. Health Sci., Nagasaki Univ. 14(2): 115-123, 2001